

ブータン紀行 (2008年10月8日~10月15日)

ブータン王国の位置



「Yahoo!地図」より

ブータン王国 (Druk Yul) の地図



「地球の歩き方」より

社会・政治の予備知識

- ・面積は九州と同じくらい。人口は約70万人。首都ティンブーの人口は7万人程度。
- ・人種は約6割がチベット系のブータン人
- ・宗教はチベット仏教系のカギユ派の中のドルック派が国教となっている。ヒンドゥー教徒もい

る。

- ・言語は、ネパール語、英語、ヒンディー語、地方の言語などたくさんあるが、公用語はゾンカ語、第2公用語は英語。小学校の授業ではゾンカ語の授業以外は英語で行われる。
- ・通貨はニユルタムで、インドルピーと等価。1ニユルタム=約2.5円

1974年まで鎖国状態にあったが、1972年に先王の急死後16歳で即位した第4代目のジグメ・シンゲ・ワンチュク国王が独自の近代化を進めてきた。

国王は、経済成長や金銭、物質的価値を追求するGNPではなくGross National Happiness（国民総幸福度）の追及を国是に掲げ、手段の一つにすぎない経済成長を目的化してはならないと戒めている。客観的指標化は困難だが、4つの開発原則（公平な社会経済開発、伝統文化の保護・振興、自然環境の保全と持続可能な利用、市民参加型の統治）と、9つの要素（living standard、cultural diversity、emotional well being、health、education、time use、eco-system、community vitality、good governance）を掲げ、指標化を検討中。

また、国王自ら民主化を宣言し、新憲法を制定、議会制民主主義に移行した。国王定年制を唱える国王は2006年に65歳を待たず51歳で、26歳のジグメ・ケサル・ナムギャル・ワンチュク新国王に譲位し、2008年11月に戴冠式が行われている。

小学校から英語で授業を行う一方、伝統文化を重んじ、民族服の着用や伝統的な建築様式が推奨されている。教育費と医療費は無料。国内でのたばこ販売は禁止。公共の場での喫煙は禁止されているが家庭で嗜好は問題ない。プラスチックバッグ（いわゆるレジ袋）の廃止など、その今日的な政策は注目に値する。

いざ、ブータンへ

ブータンへは日本からの直行便はないので、バンコック、コルカタで乗り継いだ。写真はバンコックに着陸する直前。彼方まで水田が広がっている。日本より一反が細長いのが特徴。



コルカタを離陸して30分ほどすると雲の間隙にヒマラヤが見えてくる。



パロの空港に降下する途中、両側を山で囲まれた谷の中を縫うようにして飛ぶ。斜面の上に建つ民家が頭上を過ぎていく。昔、高層ビルが林立する香港のカイタック空港に着陸するのが大迫力と言われたが、これははるかにその上を行くアトラクションだ。視界が悪いと落ちても不思議ではない。



エアバス 319A は無事着陸。伝統建築風のターミナルビルへ向かう。国営ドゥルック航空は毎日 1 便もしくは 2 便程度か？、ネパール、インド、タイなどと結んでいる。



国内唯一の国際空港（国内線はない）のあるパロから首都のティンブーまで 1 時間弱の谷沿いのドライブ。渓谷の対岸にタチョガン・ラカンが見える。ラカンとは寺院のこと。斜面が赤く見えるのはトウガラシを乾かしているところ。



ティンブーの街はずれにあるタシチョ・ゾンには国王のオフィスとブータン仏教の総本山を兼ねている。国家元首である国王の執務室と宗教指導者であるジェ・ケンポ（大僧正とも言うべきか）の居室もこの中にある。ゾンとは城塞のことだが、このような役所と寺院を兼ねたゾンが国中（各県）にある。タシチョ・ゾンの周囲には王宮や国会議事堂、各省が建っている。質素な木造平屋の農務省や財務省の建物がバンガローのようでもてかわい。

タシチョ・ゾンの中にある広場では、ちょうど「ツェチュ」と呼ばれる法要（祭り）が行われていた。



首都ティンブーの目抜き通り、両側に商店、飲食店、ホテル、土産物屋がたち並ぶ。ブータン国内には信号交差点がーカ所もないらしい。この交差点では混雑時には警官が手信号で往来をさばく。



携帯電話屋はどこもお客で混んでいた。リンゴ、豆類、トウガラシなどが並んでいる。キャロムと呼ばれるおはじきとビリヤードを足して2で割ったようなゲームに興じる人たち。



インドでもそうだったが、ホテルの部屋には必ずロウソクが置いてある。一度も使うことはなかったが、停電の備えらしい。

ブータン政府は自然環境保護に力を入れているため、環境保護に対する意識は高そうだ。日本でも一部で見かけるようになったが、連泊の場合にシーツやタオルの洗濯が不要と感じた時は意思表示するよう呼び掛けている。



ディンブーの標高は約2400m。今日は標高3150mのドチュ・ラ峠を越えてプナカへ向かう。途中、軍の基地の前を通った。木造のゲートがあるが物々しい様子はない。軍と言っても、たぶん陸軍しかないのだろう。ちなみに戦車は一両もないようだ。

峠をのぼる途中で、子どもたちにあった。道端や山の中のあちこちで犬をみかけるが、殺生を嫌うので野犬がどんどん増えているらしい。ブータンにとっての今日的な社会問題だ。



ブータンには、この東西に長い国土をいくつもの峠を越えてつなく唯一の東西縦貫道路とその支線しかない。1.5車線の舗装道路でお互い譲り合えば難なくすれ違することができる。

県と県の境には簡単な検問所が置かれていて、ガイドさんが何か届を出している。何のために国の中に関所があるのかわからないが、元々あるほうにしてみればあって当たり前なのかもしれない。



ドチュ・ラ峠から見たブータンヒマラヤ。雲の上に雪をかぶった山がかろうじて見える。ブータン最高峰のガンカル・プンスム（7570m）はどこにあるかはっきりしない。世界最高の未踏峰でもあるが、現在、宗教的な理由で登山は禁止されている。冬場はもっと雲が少なくて山がきれいに見えるそうだ。



峠からは、一気に 1000m以上かけ下りる。きついカーブの連続で結構ハードなドライブだ。峠からプナカ方面に下りる途中、道端でウリやワラビを売っている人がいた。



民家の屋根が赤いのは唐辛子を乾燥させているところ。棚田に囲まれたプナカの近くの集落の風景。このあたりは標高が1300mほどで温暖なためバナナなども見かける。耕して天まで至るとはこのことか。



民家の壁に描かれた絵、子孫繁栄を願って描いたのか、おおらかで屈託がない。



川の合流点に築かれたプナカ・ゾン。マディソン郡の橋のような屋根付き橋を渡って、城壁の中に入る。内部には役所と寺院が入っている。寺院の内部は撮影禁止。五体倒地でお参りをした後で僧侶が聖水をくれるのでそれを口に含んで体につける。



プナカの街の近く、ブータン式の仏塔とチベット式の仏塔が並んでいる。顔の描いてあるのがチベット式。



「ゴ」と呼ばれる男性の民族衣装。手織りのものを天然染料で染めたものは高級品だ。ハイソックスに革靴を履くのが正装。着せてくれたのはガイドのクンザンさん（21歳）。彼は日本語は勉強中なのであまり話せないが、基本的に若い人は流暢な英語を話す。

ブータンといえば色彩鮮やかな切手が有名。記念に買って日本に手紙を書いてみることにしようと思う。郵便局には切手コーナーがあるらしい。



翌日はパ口の近くのタクツァン僧院をめざす。道端には犬も多いが、牛や馬もたくさんいる。パ口の市街地の空き地に生えていた大麻草。地域の草刈り作業などで駆除してもすぐまた生えてくる。日本の大学生が見たら喜びそうだ。



ふもとから見上げたタクツァン僧院。8世紀にブータンにチベット仏教を広めたグル・リンポチエが瞑想をしたと伝えられる聖地に歴代の実力者が伽藍を追加していった。標高約3000m。絶壁の途中にあり、どうやったら行けるのか不思議なくらいだ。標高差500mほどを登らなければならないので、途中までロバに乗ることもできる。



クリフハンガーでなければとても近付けないように見えるが、まるで聖域に入る結界のような滝が落ちる谷を回り込むと、意外と簡単にたどり着くことができる。



ブータンでは寺院以外にもあちこちにダルシン、ルンタ（経文を印刷した旗）やマニ車を見かける。旗が風ではためいたり、マニ車を1回転させればお経を読んだのと同じ功德があるのだそう。回す時は時計回り、マニ車は大きいほど効果が高いらしい。なかには、水力マニ車もあって水車の力で功德を生産し続けている。



パロには敷地が広くてのんびり過ごせるリゾート風のホテルが近年たくさんできつつある。これはブータン名物？石風呂。ぬるい時は頼むと焼けた石を追加してくれる。石の成分が溶け出して温泉効果があるらしい。



パロの市場では、野菜、赤米などの穀物、チーズ、腸詰、いろんなものが売られている。クルミのように見えるのはドマと呼ばれるピンロウ樹の実。ヤシの実を小さくしたようなもので殻には酸えたような臭気がある。この実に石灰を添えてキンマの葉っぱで包み口の中でしばらく噛んでいるとタバコのような生理作用があるらしい。試してみると、とても渋いというか苦いというか習慣がない者にとってはどこがいいのかわからない。石灰が入ると赤く発色するらしく、たまった唾液を吐きだすと地面が赤く染まる。生理作用はというと、一瞬頭がくらくらしたような気がする。一緒に噛んだクンザンさんは頭が痛くなったそうだ。



パロを後に、陸路インドに向かう。インドとの国境の街プンツォリンまでワン・チュ（ワン川）の峡谷沿いにマイクロバスで160km、約6時間のドライブだ。険しい山ひだに沿った道で、ところどころ崩れていたり工事中だったり、路面は悪くカーブも多い。左右どころか上下にも揺られてドチュ・ラ峠よりもずっとハードだ。



すれ違うトラックには派手な装飾がしてある。インドのトラック野郎といったところか。

途中で立ち寄った売店（ドライブイン？）のようす。カウンターの左に置いてある青いカゴの中にはドマが入っていた。赤い皿の中にはスパイシーな穀物のシードが入っている。インドでは食後によく出てくる。エチケットキャンディーのようなものだろう。



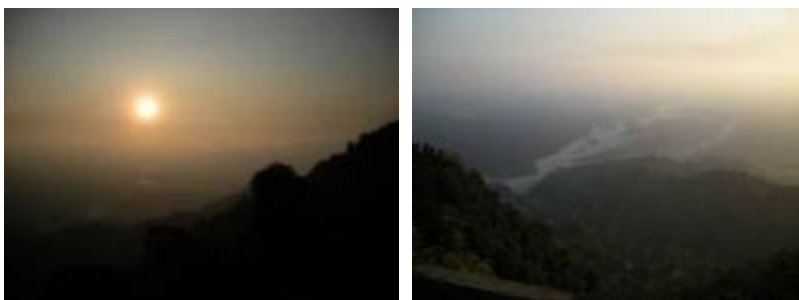
途中、ダムが見えるレストランで昼食。いままで食事には触れなかったが、ツアー中のすべての食事はビュフェスタイル（バイキング）だった。観光客の味覚にも合うように、米、焼きそば、肉の煮込み、餃子などが出されるが、本来ブータンの家庭料理は唐辛子やチーズが多用され、とても辛いらしい。



ブータンの最大の輸出品は電力。水力発電所でつくられた電気は送電線でインドに送られる。他の外貨獲得手段は観光。マツタケなどのキノコ類も輸出している。



日没近くになってインドの平原が見えてきた。ブータンの山々から流れ出す川はやがてブラマプトラ川となってベンガル湾にそそぐ。



翌朝、国境の街プンツォリンのホテルにて全員で集合写真。ブータンのガイドさんたち（前列右）は仕事を終えてラフな服装に着替えていた。民族服を着ているのは運転手さん。



ブータン側から見た国境のゲート。これをくぐるといきなりインドの喧騒とゴミの山が待っている。バスの上には人の山が。



振り返るとブータンの山々が目に入る。山から出て来た急流はここからゆったり平地を流れる。



ダージリンを擁する西ベンガル州はお茶の産地。一帯には茶畑が広がる。日本と違って茶畑には日陰をつくるためにアカシアの木が植えられている。そのなかで女性たちが茶摘みをしていた。水田の中にある櫓は、ゾウの監視塔なのだそう。夜間にゾウが侵入してきたら花火で脅かすのだそう。



ブータンの参考サイト

< ブータンの旅 >

<http://www.eorc.jaxa.jp/imgdata/topics/2008/tp080312.html>
<http://bhutan.mitsui.ws/bhutan100.html>
<http://www15.ocn.ne.jp/~bhutan/bhutan001.html>
<http://www.pref.kanagawa.jp/osirase/kokusai/2eandc/messenger/20070801wakabayashi.html>
[http://www.tellusgp.com/CAFE/TRAVEL/TRAVEL\(BUTAN\).html](http://www.tellusgp.com/CAFE/TRAVEL/TRAVEL(BUTAN).html)
<http://achikochi.takema.net/Bhutan-paro02.htm>
http://www.himalaya-kanko.co.jp/t_bhutan/t_bhutan.htm
<http://www.esri.jp/~nobu/asia/alubum/13bt.htm>
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%96%E3%83%BC%E3%82%BF%E3%83%B3>
<http://ouac1949.web.infoseek.co.jp/b-isihara07report01.html>
<http://ameblo.jp/gnhgnh/page-13.html#main>
<http://eco.goo.ne.jp/life/world/bhutan/>
<http://www.bbweb-arena.com/users/et/bhutan/bhutan.htm>
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%96%E3%83%BC%E3%82%BF%E3%83%B3%E3%81%AE%E5%9C%B0%E7%90%86>
<http://www.gotenyama.com/travel/bhutan/bhutan0.htm>
<http://www5d.biglobe.ne.jp/~yukinko/butannotabi1.htm>
<http://www.gijodai.ac.jp/csas/knowledge/bhutan.html>
<http://www.sekishu.jp/bhutan/b.view.htm>
http://nakao-db.center.osakafu-u.ac.jp/bhutan_p.html
<http://www5d.biglobe.ne.jp/~yukinko/butannotabi1.htm>
<http://www.geocities.co.jp/SilkRoad-Desert/2332/index.htm>
<http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Library/5863/BHUTAN01.html>
<http://www.iip.co.jp/bhutan/>
<http://bhutan.fan-site.net/kanntyou3.htm>
http://www.noguchi-ken.com/message/b_num/2007/1022.html
http://www.japan-bhutan.org/cultuer_mountain.html
<http://www.geocities.jp/ttanokura3/bhutan/honbun.html>
<http://sekainopon.web.fc2.com/>

< ブータンの国づくり >

http://www.nishinippon.co.jp/nnp/world/bhutan/20070516/20070516_002.shtml
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/hyouka/kunibetu/gai/h10gai/h10gai10.html>
<http://www.gnh-study.com/>
http://blog.livedoor.jp/cannon_ball/archives/17679666.html
<http://musosha.air-nifty.com/mplatz/2005/04/gnh.html>
<http://www.tashidelek.com/main.html>
http://www.thinktheearth.net/jp/thinkdaily/report/rpt_30.html
<http://dic.yahoo.co.jp/newword?category=2&pagenum=1&ref=1&index=2006000067>
http://www.sloth.gr.jp/aboutus/event/2008/0803slowtour_1.htm
<http://web.kyoto-inet.or.jp/people/aasja/archives/BhutanNFE.htm>
<http://www.afpbb.com/article/politics/2369137/2768455>
<http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/600/7740.html>
http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/event/sy_050926.html
<http://www.google.co.jp/webhp?sourceid=navclient&hl=ja&ie=UTF-8>
<http://homepage1.nifty.com/o-terue/butan/index01.html>